



地獄で極楽？

鬼さんこちら



幸(サチ)

不幸な人生を歩み、遂に死んでしまった哀れな男。その上、手違いで地獄に堕ちる。生前は性奴隷のような状態だった。気が弱く、自信もない。生前の影響で性に対する印象が病的に悪い。生前、一人だけ好意を抱いた女性がいた。自分の髪型が嫌い。

喜鬼(キキ)

あの世に住む女の鬼。閻魔の娘。悪戯が大好きで、時とんでもないことをしてかす。その結果、サチを地獄に落としてしまう。本質はとても優しい性格。姉がおり、姉のために奔走していて優しい姉が大好きらしい。「ししし」と笑う癖がある。閻魔の血を引くため、実はかなり優秀な鬼。





羅鬼(ラキ)

サチが地獄で出会う長身の女の鬼。

人語を解していないのか一言も発さない。

サチを見つけるなり襲い掛かってきて、
終いにはサチを無茶苦茶に犯してしまう。

地獄の鬼らしい怪力を持ち、空を飛ぶ
等の超能力がある。

サチが生前、好意を持った女性によく似ている。

しかし、振る舞いや表情は似ても似つかず、

所作の一つ一つがサチを肉体的にも精神的にも
追い詰める。



これまで生きてきて…これ程力がないことを悔いたことはない…
この哀れで、弱いこの子を助けない…。

助けてあげたい…だから…私はこの子に言ったんだ…。

「…ここを出て、私と一緒に暮らす…？」

…と。

約束したのに…。

それなのに…。

.....

地獄：。生前、悪事をはたらいた者が堕ち、悪事に見合った罰を
与える場所。恐ろしい鬼たちが、容赦なく亡者を責め立てる。

死ぬよりも苦しい責めは終わることはなく、既に死んだ亡者は
死ぬこともできずに延々と責められ続ける。

腕がもがれようが、舌を引き千切られようが、目を抉られようが
臓物をかき回されようが、全身の皮をはがされようが、焼かれ、
首だけになっても、終わることがない。



…僕は…地獄に堕ちました。

きつと、僕が汚いからだと思う…。僕は、飼われていたから…。

色欲に塗れた主人が僕の飼い主でした。

男でも女でも気に入った者全てを性欲の対象にしていた男で、

僕は何度も犯された。時々客を招いては、僕に自慰行為を強要した

り、客人に「貸し出し」されたりもした…。

僕は、汚れてる…。だから地獄に堕ちたんだと思います。

閻魔様も、そう言っていた…。

「入りましたまえ」

僕は死んで、川を渡りました。しばらくしたところに、大きな建物があつて、中から声がありました。直感で、この子が閻魔様なのかと思ひ、閻魔様ですか、と尋ねたんです。



すると、その子はニカッと笑って

「うふふ…そう？わかる？にしし！そうとも！僕は閻魔様だよ！」
と上機嫌な様子で答えました。

閻魔様がこんなに可愛い姿をしているとは思いませんでした。
見た目は僕と同一年か少し下程度。



「さてさて、これより君が地獄と極楽、どちらに行くかの判決が下るわけだけど…
覚悟はいいかな？僕は閻魔だからね。バチつといくからね？」

…できることなら、死ぬ前に同年代の女の子と仲良くなりたかった…

普通の男として…手を繋いだり…話をしたりしたかった…

僕には、少しの思い出しかない…。穢れた人生の中の極々僅かの思い出…。
たった一人だけ…僕に優しくしてくれた女性の思い出…。



「…もしも…何してるの？僕の顔に何か付いてる？人の顔をじっと見てさ」

「…あ…いえ…可愛いって思ってた…」

「可愛い？なにが？」

「…」

僕は無言で閻魔様を指差しました。



「……………」

閻魔様の顔が赤くなりました。でも…

「そ、そんなこと言っても、判決に影響はないからね！へい！書類！」

そう言っ、後の鬼に書類を渡すように命令していました。

後の鬼はワタワタしながら紙の束を閻魔様に渡し、閻魔様はそれに目を通していました。
そして…



「…ふん…なるほど…君はどうかやら生前、色欲に塗れていたようだね…穢れている…
今の齒の浮くような台詞もそういうことか…全く…度し難いな…」

僕はその言葉に思わず目を伏せました。穢れている…その通りだ…

「判決を言い渡す…地獄行き…その悪行の数々をしっかり噛み締めなさい！」

こうして、僕は地獄に堕ちました。



「……今日も、みんなが火の山に入っていく……血の池に沈んでる……」
不思議なことに、僕は地獄に堕ちたというのに何もされていません。
何もされないのです、ずっと地獄を彷徨っています。鬼と目が合っても
バツが悪そうにされ、目をそらされます。

手足をものがれ、生やされ、またものがれを繰り返したり、気を失うこと
もできず、悲鳴を上げ続ける亡者を見るのは、正直苦しいけど……
責めの対象でないだけ幸せなのでしょう……

今も悲鳴の間こえない亡者や鬼のいないところを求めて彷徨って
います。せめて静かにしたい……

どうやら地獄の亡者は意識を失うことができないようです。

どんな苦しみを味わおうが、首だけになるうが……


より、苦しみを与えるためでしょう。意識を失っては苦しみが少なく
なるから……。僕もそれは同じみたいで、眠ることができません……

頭がおかしくなりそうになることもあるけど、そういったときは
頭を空っぽにして、ボーっとすることで気を紛らわせています。

時々、生前の幸せだった僅かな思い出に浸ることもあります。

僕が唯一、恋をした女性の思い出……





客人を招き…僕を「貸し出す」段になったとき、名乗りを上げた
一人の女性…。髪の色や顔立ちが普通と違って、周りの客が「鬼」と
呼んでいた女性…。

だけど、その人は僕を「借りる」と他の人がしていたようなことは
何もせず僕が裸だからと、同じように服を脱ぎ、ただ、一緒に布団で
僕を抱きしめて寝てくれた…。

柔らかくて、あったかくて、いい匂いがして…。

僕の人生で、最も幸せな時間だった…。たった一晚のことでも…
一緒に暮らそう…。そう言ってくれた…。

例え果たされなかった約束でも…僕は嬉しかった…。

「……………」

思い出すだけで、心がぼかぼかしてくる…。気が付けば、僕は
鬼も亡者もいないところを歩いていた。責苦はなくとも、退屈な
時間を癒してくれるのは…この思い出だけ…

「……………?」

そのとき、何か視線を感じて僕は空を見上げた。

「……………」



「!あ...ああ!」

そこには鬼がいた。しかし、その姿は他の鬼とは違い、人間に近い姿をしていた。
大きな金棒を片手に持ちながら、宙をフヨフヨと浮いていた。

なにより驚いたのが...

似ていた...あの人に...

僕を抱きしめてくれたあの人に...

僕はその鬼を見上げながら目から涙を溢れさせていた。



僕の姿を見ていた鬼は何かを考えているようだった。
目を閉じて、何を考えているんだろう…。

僕は、思わず声をかけた。

「あ、あの…こ、こっち来て…こっち来てください！」



その言葉に鬼は反応した。

また僕の方を見ている。

僕はとにかく、「あの人」に再会できたような気がして、嬉しくて仕方がなかった。
話がしたい…仲良くしたい…そう思っていた。

でも…



その笑みを見た瞬間、体に寒気が駆け巡った。

違う…。この鬼は違う…。

あの人に似てるけど違うんだ。



に、逃げないと…！そう思って、踵を返そうとしたとき、鬼は歯を剥いて笑い、まるで大鷲が獲物を持つるようにこちらに飛んできた。

「ひッ返

腕をつかまれ、引き摺られる。



「な、何するの！やめて！」

抵抗するも、手を止めてくれる様子はない。

いくら言葉を投げかけても、人語を解しているのかいないのか、
返答はない。

「やめて！やめて…ぎゃあ！」

体を思い切り地面に叩きつけられた。息つく間もなく鬼は僕の
体を殴打した。

「い…ぎゃあああ！」

逃げようとしても、髪をつかまれまた引き倒される。

僕は容赦なく痛めつけられた。



「う…ぐ…ううう」

体中に痣が浮かぶ…。他の亡者と同じなら、痣は消えるだろうけど…
痛い…痛い…痛い…

「う…あ…」

鬼は、僕の髪を掴んで
僕を立ち上がらせ
まじまじと僕の顔を見ていた。
痛い…怖い…でも何よりも…

あの人そっくりの顔をした鬼が
僕を痛めつけている事実が辛くて仕方がなかった。



「もう…もうやめてください！その顔で…その顔で痛めつけなくて

…責め苦なら受けます…だから…他の鬼に…他の…」

耐え難いことだった…。体も心も痛くて仕方がなかった…。

「お願い…お願いだから…。」

「マムギヤ」





「が…が…!?!」

次の瞬間、僕の腹に鬼の膝が突き刺さっていた。

「っ!?!」

蹴り上げられた腹の中で、内臓が膨れ、息ができなくなる。

「ッ!?ッッ!」

腹の中で大蛇がのた打ち回っているかのような苦しさが襲う。

「や...め...ッ!?」

鬼は恐ろしい形相で
繰り返し蹴り上げてくる。

僕の懇願は届かない...



「がっ…!? かつ…!」

どれほど繰り返し蹴られたのかは分からない…。内臓を吐き出して
しまいそうな苦しみが続いている…。

白眼をむいて悶絶している僕を見て、

鬼は満足そうに笑っていた。

そして、そのまま僕は投げ捨てられた。



「……………」

僕は、ただ宙を見ていた…現れたあの人そっくりの鬼…その鬼にいたぶられた…。何かの間違いでないのか…。

その考えを何度も繰り返す…何度も何度も繰り返し、時間が過ぎていく…。眠ることができないため既に時間の感覚は生前のようにはないけど…。

そのとき、僕に影が覆った。

「え…？くあ!？」

影の正体に気付く前に、僕は蹴り上げられ、地面に倒れた。

「はっ!？」

鬼が戻ってきていた。

そして、鬼は僕を何度も足蹴にしてきた。



「ヒィ!？」

僕は咄嗟にうずくまって、体を守ろうとした。

しかし、それでも容赦なく僕は踏み潰されていく。



「やめ…、やめて…！やめ…ひっ！」

恐怖しながらも懇願しつつ見上げた鬼の表情に、僕は恐れおののいた。明らかに僕をいたぶるのを楽しんでいる。

苦しみ恐怖する僕の姿を眺めながら、深い悦楽にひたっている。



頭上でゲラゲラと笑う声が聞こえる。その不快な笑い声と共に、足が僕の体に突き刺さる。鬼はより一層顔を歪ませ、恐ろしい笑みを浮かべている…。

「あの人」の印象からは想像もつかない顔…。

もう、やめて…。これ以上、僕の思い出を汚さないで…。お願い…。

耐えかねて顔を伏せようとしたそのとき…



「……………」

「あの人」がその場に現れたような気がした…。

とても悲しそうな表情で僕を見ていた気がした…。

でも、次の瞬間には、僕は蹴り上げられ、宙を舞っていた…。

そのまま鬼はその場を後にし、再び僕はぼろきれの様に地面に転がり放置された。





「ああ…やばい…やばいよお…どいっらっちゃったんだろぅ…。」

このままじゃ…このままじゃあ、あの子は…。

もしかして、捨てられちゃったのかなあ…。」

「金庫も調べた…書類置き場は全部見たし…僕の部屋も見た…。」

うーん…もしかして、餓鬼が…。」



「…あ、姉様！お帰りなさい！」

「気分はどう？僕は今、ワタワタしてて……」

「姉様、少しずつ良くなってるって父様も言ってるし、僕……」

「……………キキ……」

「え……姉様……」

「…キキ…私ね…いやな夢を…見てた…夢…だよ…ね…？」
……………」

「！と、父様あ！姉様が！」

「……………」



「父様…どう…？姉様は…さっき、僕のこと呼んだんだよ？」

「今はまた、黙っちゃってるけど…ほんとだよ…？」

「駄目だ…。一時的なものだったんだろう。なにかが、影響したんだろうが…地獄で何が…？」

「ん？……なにかあったんだな……。だが、この状態ではいずれ暴れだす…。引き続き地獄に引つ張られるだろう…。」

「…そう…。」
「ところで…キキ。私に何か黙っていないか？」

「…！…ごめんなさい…父様…。でも、今は言えません…。解決したら、話します…お仕置きも受けます…だから…。」

「…仕置きが必要なことか…。…次第によっては拳骨ではすまんぞ……分かっているな？」

「…はら…」

「……………」

呆然としていた…。何もしたくなくなっていた。僕は、目を瞑り、ただ、寝転がっている。当然眠ることはできない…。あの人の思い出に浸ろうとしたら、あの鬼の姿がちらつくようになった…。

あんまりだ…。酷すぎる…。

ただ、瞼の裏の間を見続けている。このまま、その間に溶けてしまいたい…。そう考えるほどにやるせなかつた。

あの鬼にいたぶられた際にほどけた禪を結び直すことなく、ただ死体のように地面に仰向けになっている…。

「うっ!? くああああ!」

突如、下半身に激痛が走った。思わず体を起こし、目をやる。